

中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」（第3回）議事概要について

中央防災会議事務局（内閣府（防災担当））

1．専門調査会の概要

日時：平成16年3月8日（月） 14:00～16:00

場所：虎ノ門パストラル新館6階「アジュール」

出席者：伊藤座長、池谷、尾田、北原、寒川、清水、首藤、関沢、武村、平野
廣井、藤井の各委員

尾見内閣府政策統括官（防災担当）、原田内閣府大臣官房審議官 他

2．議事概要

事務局から調査の進捗状況について報告した後、「明暦の江戸大火」及び「安政江戸地震」に関する報告書案について分科会の主査等から説明を行い、各委員からは以下のような意見等が出された。なお、詳細な議事録については、後日各委員の確認を経た後、公表する。

報告書のまとめ方について

この調査会がとりまとめる報告書の趣旨を整理すると、新しい発見をめざすものではなく、歴史学や社会学などの文科系の学識者と、地学や工学などの理工系の有識者により、これまでの研究成果を検証・整理し、歴史災害を政府としてしっかり記録し、そのうえで、現代に通じる教訓を導き出すことである。

防災行政上の教訓ももちろんだが、各界各層にどのように伝達していくか、そのためのネタ本となるようなものであってほしい。災害の経験がない読み手にも教訓が「染み込む」ような内容であってほしい。

報告書は、当時の建物や暮らしなどが伝わってきて、読み物としてもおもしろい。説得力ある伝説や、言い伝えをエピソードとして入れると心の部分も含め読み物としての効果が高まると考える。

危機意識を喚起する工夫がもっと必要ではないか。また、報告書は印象に残ることが大事であり、例えば見出し一つでも説明書的なものでなく読み手の興味を引く工夫が必要である。

教訓のまとめ方について

歴史的災害から現代社会に通じる教訓を導き出すことは、社会構造、法体系、防災体制等が違うことから難しい作業である。そうした違いを踏まえて現代に通じる教訓を導き出せるとすると、時代を超えて教訓となる一般的・抽象的な教訓があげられるが、それに加え、震度分布や災害発生状況等にかかる理学的な知見からの教訓、法体系や防災組織の違いがあまり影響しないコミュニティレベルの教訓があるのではないか。

教訓としてまとめる際は一般的・抽象的になり空疎なものとなる可能性もある。しかし、個々の報告書の中身に記述されている過去の人々の具体的な災害への対応を併せて読んでいただくことにより、鮮明なメッセージとなりうるのではないか。

個別災害を横断するテーマによるとりまとめの提案

救助、救済、情報、復興支援、コミュニティの対応など分野横断的にまとめたり、地域別にまとめたりすることも必要ではないか。

救援の歴史、情報の歴史といった災害を横断する切り口をこれから考えていけばいいのではないか。「タテ系」「ヨコ系」で見直すことは報告書の蓄積が生きてくることになる。

その他

防災に関する民間伝承があるが、人々の記憶から消えていっている。また、その内容全てが正しいものかどうかについても検証されていない。このため、民間伝承について現代の科学の目で見るといいう試みはどうか。また、慰霊碑や記念碑、民話集のなかから災害に関するものを取りまとめてはどうか。

災害史をこの国で大事にすることはなかった。実際に起こったことをしっかり記録することへの認識が希薄になってきているような気がするので、本調査は起こったことを記録する取り組みとして評価できる。

- ・両報告書案については、本日の意見を踏まえ、今後、座長と事務局で文案を修正のうえ、後日報告書として公表することが了承された。
- ・次回専門調査会の日程は、7月頃を目途に調整する。
- ・内容については、以下の項目について検討する予定。

〔 報告書作成に関する中間報告 〕
〔 報告書の活用について 〕

< 問い合わせ先 >

内閣府政策統括官（防災担当）付

防災総括担当 企画官 石井 晴雄

同 主査付 高部 信孝

TEL: 03-3501-5408（直通）